

ハワイ大学臨床推論ワークショップ報告書

この度、ハワイ大学医学部ワークショップに参加させて頂きまして誠にありがとうございました。

私にとって今回のワークショップはこれから先医療者を目指す上で、大きな道標となったと実感しています。

今まで学んだ知識をどれほど生かすことができるのか、また現在医学生として自らの立つ場所はこういったものなのか、それらを確認し見つめ直すことが今回ワークショップに参加するにあたっての最大の目的でした。

そしてそれは予想を遥かに超える衝撃を私に与えました。

まずはハワイ大学のPBLについてです。ハワイ大学では triple jump と呼ばれています。佐賀大学ではハワイ大学のPBLを基としてPBLが行われていますが、日本でのPBLと大きく異なる点はチューターの先生が症例における患者役を演じるということです。実際に様々な問診を行い、それに従い仮説を立てていきます。日本では生徒に次々とシナリオが配られますが、向こうでは一切配られません。そのため生徒同士で活発な議論が行われます。実際私も相当考えながら症例検討ができました。また、診断がついた後はそのまま learning issues を各々が調べにいきます。そして再度全員が集まってそれらの発表へと移行していきます。この3段階の学習が triple jump と呼ばれる所以です。日本では日を跨いで learning issues の発表を行うため前回の記憶が薄いでしまいやすいです。しかし一気にこの3段階を踏むことで新鮮な頭のまま学習を進めることができるため大変効果的であると実感しました。

次にハワイ大学の授業についてです。日本では講義という形式を取っているため授業中はどうしても受け身がちになってしまいます。しかし向こうでは先生ととてもオープンな関係が築かれます。例えばある実習でのことです。目の前に突然倒れたという設定の実習用人形がありました。その人形はモニタリングされていて、vital sign と心電図を確認することができます。私達の前には多くの薬や医療器具が用意されていて、まず先生に蘇生を試みるよう指示されるのですが、それと同時に何故突然倒れたかの鑑別疾患をあげるように言われます。一度に複数のことをこなさなくてはなりません。当然蘇生法も自分達で考えます。それは今の實力では大変難しいことでしたが、どんなに些細な意見でも先生は「確かにそれも考えられる、よく思いついた！」とその意見を尊重してくれます。それによってこちらも大変自信をつけることができた上に、もっと勉強しようという意欲が湧きました。

そして今回最も感銘を受けたのは様々な医学部生との出会いです。日本全国さらには韓国からも参加する生徒がいました。彼らは学年も年齢もバラバラで

したが、共通してこれから医師になる上での人生設計について明確な考えを持っていました。特に韓国の生徒は強く自分の意見を持っており、世界の様々な医療を見学しそれを自国の医療発展のために生かしたいと願っていました。そのような強い信念を持った学生達と交流する中で私ももっと積極的に行動し、多くのことを勉強しなくてはならないと考えました。

日本人はシャイでなかなか自分の意見を表に出さず、大多数の意見に流れやすい民族です。しかし私達になる医師という職業は大多数の意見に飲み込まれてはいけないものだと私は考えます。患者さんの病態は刻一刻変化し続けます。もしかしたら他の先生達が診断した疾患と異なる疾患であるかもしれません。あらゆる可能性を考慮しつつ対応する柔軟性をもつことこそが重要だと考えます。そのためには沢山の知識を得なくてはならないし、様々な意見を聞かなくてはなりません。今回のワークショップはそのことを実感できる最良の機会でした。

今年から実習が始まり、残すところ学生期間も2年となりました。まだまだ学ばなくてはならないことが数多くあります。今回習得したこと、実感したことを決して忘れず、高い意識を持って実習に励みます。そしてもしまた機会があれば他の海外の医療を見学して自らの糧にしたいと強く願います。

ハワイ大学 Learning Clinical Reasoning Workshop 実習報告書

今回、ハワイ大学との臨床推論ワークショップに参加する機会をくださって、誠にありがとうございます。ハワイだけでなく、日本のあらゆる県や韓国から来た学生と交流を深め、自分の医療を学ぶ姿勢を見直すことができました。忘れられない貴重な体験となりました。

実習の成果についてご報告いたします。実習は主に講義、医療面接、簡単なPBL、実際の体やシミュレーターを使った身体診察から成っていました。

実際に先生方の講義を聞いていると、例えば、病名は重症度順または臓器別に挙げていくこと、開放的な質問から始めていくこと、VINDICATEに沿った鑑別診断など、基本的な姿勢は日本での学びと変わらないことが印象的でした。普段の学校での講義がそのまま生かされており、改めてその重要性を感じました。

また、先生方は大変陽気で、ともすれば緊張しがちな学生に対して、リラックスするように繰り返し励ましてくださったのを素敵に感じました。病院の近くに住んでいるホームレスの方に、ボランティアで医療を提供している話が印象的でした。

医療面接では、10分間に、模擬患者さんに問診と簡単な身体診察を行いました。私自身は、思っていることを英語にして伝えることができない歯痒さを感じ、より明確な表現力を身に着けたいという思いを新たにしました。細かい文法は間違っていると分かりながらも、身振り手振りをを用いると、模擬患者さんは大体の内容を理解して下さったようでした。

PBLでは、普段行っているPBLの一枚目のような大まかなものをいくつか行いました。ハワイ大学では、問診すべき項目のチェックリストを用いて、実際に生徒を評価していると聞きました。

身体診察では、シミュレーターを用いて、呼吸困難やアナフィラキシーショック状態に陥った患者さんへの対応を学びました。どのような薬を投与するか、どうやって投与するか、心電図はどのようにつけるのか、脈のふれかたの変化などを教えていただきました。シミュレーターは実際にうめき声を出したり瞬きをしたり、まるで本物のように精巧なものでした。また内視鏡や気管支鏡のシミュレーターも用いて、ポリープの発見や切除を行いました。実際の臨床の場に出る前に、このような機会をもてたことは、自分の今できることを探していこうという姿勢を学ぶとても良いきっかけになったと思います。

今回のワークショップでは、英語を話すこと、医療英語を学ぶことの重要性が改めて身にしみました。私自身は、英語が読めたとしても、意味と音声が直結していないので、なかなか話すことや聞くことが上手くできません。外国に出る機会が持てなくとも、その中で英語を話せるようになった方たちがどのように勉強しているか、具体的に教えていただ

くこともできました。今回ハワイに行ったことで、少しでも英語を使えるようになっていれば、今後、段階的に積み重ねていくことで更なる進歩につながると思います。英語で意思疎通ができたことは、大きな自信になりました。

海外に行くことで、日本の医療を客観的に見る機会を持つことができました。医療に対する真剣な姿勢や、自分から考えをはっきり表明しなければ怠惰にみなされること、ボランティアや海外留学への積極的な参加など、普段の生活を考え直させられることが多々ありました。

今回は日本やハワイの先生方のお力添えをいただき、新しいことに挑戦する機会をくださって、ありがとうございました。

ハワイ大学 Learning Clinical Reasoning Workshop 実習報告書

私は今回、ハワイ大学 JABSOM における臨床推論ワークショップに参加し、大変貴重な経験をさせて頂くことができました。

日本全国から集まった他大学の学生や韓国の学生と共に過ごした一週間は、私にとって全てが新鮮で決して忘れることのできない日々となりました。彼らの英語力、医学知識の高さ、そして何事にも積極的に取り組む姿勢は素晴らしいものでした。高い目標を掲げ、それに向かって努力を怠らない姿に、私は尊敬の念を抱かずにはいられませんでした。たとえ難しい課題であっても臆することなく、積極的に行動に移したり自分の意見を伝えることは、今後医師として歩いていく上で必要不可欠なことだと思います。意識の高い学生達と共にこのワークショップを過ごす中で、私は身をもってその大切さを知ることができました。

私が特に印象に残っているのが、シミュレーターを用いた実習です。これは学生数名でチームとなり、原因疾患の不明な患者さんに対して、限られた時間の中でどのような処置を施していくかを話し合いながら実践していくものでした。日本ではなかなか見ることのできない、緻密に再現されたマネキンを用いたこの実習では、実際の現場にいるかのような体験をすることができました。この実習で私が学んだことは、『自己主張』の重要性です。緊迫した状況下で目の前の患者さんを救おうとする時、一人でも多くの意見、アイデアがチーム医療を向上させるのだということ学びました。初日の実習で、私は自身の英語力や医学知識に自信を持てず、なかなか自分の考えを主張することができませんでした。緊迫した状況をただ見ていることしかできなかったのです。しかし、どんな状況下でも自分の考えや意見を英語で表現しようとする姿勢を忘れないチームメイトを見ているうちに、私も前向きな気持ちになることができました。決して流暢とは言えない英語ではありましたが、チームの一員として自分の役割を果たすことができたことは、今後の自信に繋がるのではないかと考えています。

他にもこのワークショップでは、全て英語で行われる医療面接、身体診察、PBL、ディスカッション（禁煙指導について）など、多くの貴重な経験をすることができました。これらを実践する中で、病状を英語で説明することの難しさ、またいかに自分の医学英語の知識が不十分であったかを思い知りました。いかなる環境でも自分の専門性を発揮できる医師になるために、医学英語の知識をより深めていくべきだと考えています。

また、私が今回このワークショップに参加しようと思った理由の一つに、自分の理想の医師像を明確にしたいという思いがありました。幼い頃からの夢だった医師になるために医学部に入学し日々勉学に励んできましたが、医師という職の実際を知り、学ぶ内容も専門的になるにつれ、私の中での理想の医師像が何なのか具体的に分からなくなっていました。そんな状況の中で参加した今回のワークショップで私は、米国の医学教育システムに触れ、多くの意識の高い学生達と交流を深めていく中で、たくさんの刺激を受け、自分なりに答えを見つけることができたように思います。私の理想の医師像…それは、いかなる状況でも患者の声に耳を傾け、患者の思いを理解しようと努める姿勢を忘れないこと、そして思いつくりの治療法や対策を提示することです。つまりよく聞き、よく伝えるというコミュニケーション能力が基盤なのだ改めて確信しました。専門化していくうちについ見えなくなりがちですが、これは全ての医療従事者にとって必要不可

欠なものです。そのことを再認識することができ、本当に良かったです。

私がハワイ大学 JABSOM で過ごした一週間は、一生の財産になる時間でした。臨床実習を控えたこの時期に、このような経験をすることができ、心からありがたく思います。今回得たものを糧に、立派な医師になるためより一層勉学に励みたいです。

2015年3月 ハワイ大学 Learning Clinical Reasoning Workshop 実習報告書

この度3月9日(月)~14日(土)に行われた、ハワイ大学での Learning Clinical Reasoning Workshop に参加させていただきましたので、報告いたします。

ワークショップには韓国から参加していた学生2名を含む3~5年生24人が参加しましたが、その中で私は唯一の三年生でした。講義で習っていない分野があったり OSCE を経験していなかったりしたので、はじめての内容や慣れていない内容もありましたが、練習を重ねたり先輩方に教えて頂いたりして非常に多くのことを学ぶことができました。

1週間、呼吸困難・胸痛をメインに様々な講義・症例検討・演習などを経験しましたが、ここでは、i)呼吸困難・胸痛・禁煙指導の医療面接、ii)呼吸困難・胸痛の身体診察、iii)3症例のPBL、での経験や感じたことについて詳細に述べていきたいと思います。

i) 呼吸困難・胸痛・禁煙指導の医療面接

呼吸困難と禁煙をしたいと考えている症例について模擬患者を相手に、また胸痛の症例について学生同士のペアでチェックシートを用いて医療面接を経験しました。日本語でも数回しか経験していない医療面接を英語で行うことは大変緊張しましたが、講義・演習の後に自分なりに準備を整えてから行えたので、医療面接自体についても非常に有意義に学ぶことができ、ワークショップの中で最も記憶に残る体験になりました。次に日本で行う際にも今回の経験を十分に還元できると思います。

特に禁煙外来を想定した医療面接は、その流れを学び実際に面接する機会は滅多にはなく、貴重な体験ができたと思います。

一方で医療面接の中で模擬患者さんの話が私にとって大変早口で十分に理解できない時があり悔しく感じました。また症状に対して尋ねるべきこと、特に社会歴に関して尋ねるべきことを網羅するのは難しく、各症状を呈する疾患や原因について十分な理解が必要であることを痛感しました。

面接が終わった後、他校の5年生や韓国の学生の面接をモニターで見せて頂いたのですが、英語のスムーズな話の流れの中に聞くべきことを順序立てて尋ねていることに感心しました。特に韓国の学生は英語が大変流暢でアメリカでの実際の診察光景を見ているかのような錯覚を覚えました。自分が2年後にこのような姿になれているよう、それに近づけるよう努力をしていきたいと感じました。

ii) 呼吸困難・胸痛の身体診察

医療面接を行う前に各々の項目に関して問診や身体診察の仕方を学んだのですが、その中でも呼吸困難・胸痛に対する身体診察は印象的でした。臓器別の診察と異なり症状にあわ

せて確認したい所見を診察しているので大変合理的で感心しました。また視診・触診については日本で学んだ診察とは異なる点も見られ、それらが診断に有効だったので非常に面白く感じられました。

症状に対する身体診察は臓器別の身体診察という基礎を利用して行われるので、各症状に対して何を行ってあげればいいのかを考えながら臓器別の身体診察を網羅していくことで理解が深まるし応用も利くのではないかと実感しました。

iii) 3 症例の PBL

ハワイ大学の先生方がチューターとなり、深部静脈血栓症・腎腫瘍・虫垂炎の 3 つの症例について PBL を行いました。チューターが口頭でシナリオを読み、学生も口頭で Hypothesis や Need to Know を挙げていく形式で、話についていくのがやつの状況が数多くありました。いずれの症例も講義では既に済んでいる内容なので、より積極的に意見を述べていきただけに悔しく思います。

聴いた英語をもとに話し合う今回の PBL や医療面接、講義の中で、文字で理解することと音で理解することは直接つながらないことを実感しました。ネイティブが区切る場所と私が英文を読む際に区切る場所が異なるときに話していることが分からなくなってしまう、そんな経験を何度もして、一層リスニングの重要性を意識しました。

他にも気管支鏡のシミュレーション体験や喘息発作患者の回復までの投薬の仕方の実習、患者にとって悪い知らせの伝え方の講義など今まであまり経験したことのない演習をさせていただき、大変興味を抱くことができ身に付いたように思います。

今回のワークショップの中でハワイ大学の学生と接する機会があまりなかったことは残念に思いますが、4,5 年生と共に学ぶ中でその高い臨床推論力や診察技術、さらには高い英語力を目の当たりにして強い刺激を受けました。

一方で医学英語の講義の中で英単語を学び、論文を読んでいく中で得られた医学英単語の知識や読解力のおかげで、書いてある内容はある程度読みこなし理解することができました。これは私にとって自信になりましたし、さらに力をつけていきたいと思いました。今回の経験で得られたことを生かし、また出会えた素晴らしい先輩方に近づけるよう、臨床力や英語力(とくに聞く力)を伸ばしていきたいと考えています。

最後になりますが、他校や韓国の学生を交えた海外でのワークショップという貴重な体験をする機会を用意して下さったことに感謝申し上げます。ありがとうございました。